

R7. 12. 16

第2号

通巻166号

# 学院通信

発行  
金光学院  
719-0111  
岡山県浅口市  
金光町大谷 1486  
TEL (0865) 42-3115  
FAX (0865) 42-3114



直信教会参拝 (才崎教会)

ご本部をはじめ全教のお広前では日々お結界でのお取次が仕えられています。あらゆる人を受け入れて話を聞き、神様に取次いでくださり、神様のお働き、み心、願いを伝えてくださいます。取次のみ働きは、神様と取次者の関わりをもって、神の氏子としての生き方をお示しくださっていると思います。

お取次を頂くことで、自らの心に向き合うことになり、その後の生活における見方や考え方が変わり、生き方も変わっていくことができます。学院においても、毎朝教主金光様のお取次を頂きますが、代表のみがお結界に進むとしても、職員も含めて全員で、そのお取次を仰ぎ、そのお徳や祈りの中で修行の一日が始まり、おかげの中でお育てを頂いています。それは、一人ひとりの生き方が変わっていくお導きです。

ところが、生き方が変わるということは、これまで生きてきた中で培ってきた大切なものを否定したり、捨ててしまったりするような、痛みや戸惑いが伴いますし、不安も生まれるでしょう。「死んでもままだよ」というご理解がありますが、その後の取り組みがなかったら、受け入れることは困難なことです。

つまり、お取次によって導かれ、生活の中でだけいことをしながら新たな生き方になっていくのです。お取次を頂く怖さがあるのは、この覚悟を問われているからではないでしょうか。

お取次によって生き方が変わっていくことは、教祖様、教主金光様が頂かれる神様を、自分も共に頂いて、この神様と生きるという信心への道筋だと思えます。変わるというよりも、むしろ「神人の道」につながっていく、天地に向けて生き方が開かれていくという先の楽しみな修行なのです。

覚悟する怖さがありつつも、勇気をもって、よりありがたい神人あいやかけよの世界に連れて行っていただけるお取次を、日に日に新たに頂かせてもらいたいと存じます。

ありがたい「神人の道」へ

学院長 大代 信治



厳粛なお結界に進み、お取次を頂くことは、少なからず緊張の伴うものでしょう。また、よく耳にするのは、お取次を頂くのが怖いということです。これは一体どういうことなのでしょう。

# ここまでを振り返って

学院次長 秦 浩治

おります。

私は令和四年度に学院

へ赴任いたしました。

当初はコロナ対応が学院

令和七年度本科生八名は、十二月十六日より冬期在籍教会実習に入らせていただきます。入学から約七カ月、学院修行に取り組んでおりますが、コロナが五類へ移行した現在も、全寮制という生活環境上、面会や外出には一定の制限を設けております。そのような中、急な発熱や体調不良があっても、八名がお互いを祈り合いながら、それぞれの役割を果たそうと努めている姿は、まことにありがたいことと感じて

生活における大きな課題でありました。

本部広前参拝をはじめご祈念や食事な

どの日課の上にも、院内外での授業や

研修においても、マスク着用や手指消

毒、体温測定や体調確認など、コロナ

禍以前とは異なる取り組みが求められ

ておりました。それでも学院生・職員

ともどもに互いを祈り、助け合いなが

ら日々の学院修行に励むことができて

いるのは、教主金光様をはじめ、保証

教会長、ご家族、また多くの方々のお

祈りあつてのことと、改めて思わされ

ております。

男女寮それぞれの玄関には、「足下

を見よ」と記された額が掲げられてお

ります。この額は、私が入学した四十

年以上前にも寮の玄関にあり、目にす

るたび当時の学院生活が思い起こされ

ます。寮は建て替えられ新しくなりま

したが、学院は百三十年を超える歩み

の中で、いつの時代も学院生同士がと

もに己を見つめ、向き合い、祈り合い

ながらお育てを頂く場であり続けてき



修徳殿障子張り

を向ける取り組みを続けております。世の中には、身体や心に病を抱える方、さまざまな悩みや苦しみを背負う方が数多くおられます。言葉一つが人を生かすこともあれば、苦しめることもあり。人を思い、助かりを祈ることが教師としての願いであるならば、ここでの生活を通してお互いが祈り合い、まずは相手の思いに寄り添うことのできる自分となるよう、学院生とともに来年四月の卒業に向けて、なお一層お育てを頂いてまいりたいと願わせていただきます。



調餽実習



研究所見学

# くまもとの歩み

## ■聖蹟巡拝 (吉備路・寂光院方面)

学院では、金光大神の事蹟に関わる地を訪ね、金光大神の信心の足跡を辿るため、聖蹟巡拝を実施している。

十月二日には吉備路方面を巡り、まず、直信・片岡次郎四郎師の開かれた才崎教会に参拝した。教会長から「みきの信心」についての教話を頂き、奥城にも参拝させていただいた。その後、教祖四十二歳の事蹟に関わる西大寺観音院と吉備津神社へ参拝した。吉備津神社では、正式参拝の後、社殿や廻廊をご案内いただき、鳴釜神事も仕えて



吉備津神社 (廻廊)

いただいた。さらに、他宗教への理解を深めるため、本教と同じく幕末期に開かれた黒住教の本部を訪れた。到着後、本部神殿である「大教殿」に参拝し、信仰実践として大切にされている「日拝式」が行われる「日拝所」にもご案内いただいた。さらに「宝物館・まるごとセンター」にて講話を拝聴し、貴重な展示品も拝観させていただいた。



黒住教本部 (日拝所)

十一月十七日には大谷村の檀那寺である寂光院、氏神である加茂八幡神社へ参拝した。寂光院では、本堂で、川手家先祖並びに教祖養父母の法要を仕えていただき、一人ひとりご焼香をあげさせていただき、位牌も拝観させていただきました。



寂光院

## ■秋季霊祭・生神金光大神大祭

本部広前のご比礼を受け、学院広前において、九月三十日に秋季霊祭、十月十七日に生神金光大神大祭が執り行われた。

これらの祭典は、神様と霊神様のお働きを受け、ここまで学院修行を進められてきたことへのお礼と真心を現す祭典として奉仕される。

祭典に臨むにあたり、祭員は、神様、霊神様にお喜びいただけるよう、習礼に励み、実意丁寧な奉仕させていた。さらに、祭詞起草員は起草・浄書、調饌・祭事係は神饌物、紙垂の調

饌と祭具の調整、楽人は奏楽など、学院生全員で分担し、心を込めて御用に当たった。

複数のお役を兼ねる学院生も多く、「どこまで尽くせば神様、霊神様への真心となるのか」と、不安や戸惑いを感じつつもあったが、心を込めて御用



学院・秋季霊祭



学院・生神金光大神大祭 (奉幣行事)

に取り組み中で、それぞれに学ぶことや、感じるものがあつたようである。この度の祭典を通して、学院生一人ひとりが、神様、霊神様への思いを新たにすることができ、ありがたいことであつた。

### ■第三・四回求道の日

学院生活の基本に立ち返り、自己の信心を正していくことを願い、原則として月の朔日を「求道の日」と定め、一日のはじめに教主金光様のお出ましを迎えさせていただき、終日黒衣で過ごし、講話、共励、「覚」筆写、徒步行等を実施している。

第三回は、「覚」筆写に取り組み、さらに夏期在籍教会実習内容をもとに班付職員と個別懇談を行って、在籍教会での修行の成果と、ここから取り組むべき課題などを確認した。

第四回は、徒步行として、船着場である沙美海岸から教祖広前へ到る参拝道であつた「金乃神道」を歩き、当時参拝された人々へ思いを巡らせた。また道中、金光四神様の奥様である高清姫様のご生家(安部家)にも立ち寄り、安部家の奥城にも参拝した。



求道の日(金乃神道・道標)

### ■修徳殿入殿

学院では、本部広前の修行生としての自覚を深め、教主金光様の御取次を頂くことの意義を再確認し、お道の教師にお引き立てを願う者としての自覚が深まることを願いとして、修徳殿入殿を実施している。

第一回(九月)は、「教師志願の理由や、在籍教会・各家庭の信心の歩みをもとに、現在、どのような信心の流れの中にあるのかを確認する」との願いのもとに実施した。さらに、第二回



第二回 修徳殿入殿

(十二月)は、「ここまでの学院修行で学んだことをもとに、本教の信心生活について求め合う」ということを願いとして実施した。輔導、副輔導の教導を頂き、また修徳殿という場のはたらかみの中で、ここまでの学院修行を振り返りかえり、それぞれに、今後の課題を認識することができた。なお、来年三月には卒業後を見据えての、第三回入殿を実施する予定である。

### ■文化活動合同茶会

十一月十日、学院広前において、第二十七回文化活動合同茶会が行われた。合同茶会は、文化活動で習得してきた成果を発表し、他の講師の先生方にも触れ合い、互いの文化活動に対する理解を深め合うことを願いとしている。今年度は、典楽を全員が履修しており、合同茶会では、全員で息を合わせ



文化活動合同茶会(典楽)



文化活動合同茶会 (書道)



文化活動合同茶会 (茶道)

て演奏した。美しい音色を響かすことができ、典楽の楽しさを皆で味わうことができた。また、書道選択者は、そ

れぞれが選んだ言葉を色紙に書いて展示し、そこに込めた思いを発表した。そして、茶道選択者が実際にお点前をお茶が全員に振る舞われた。和やかな雰囲気の中で、各担当の講師との交流も深まり、有意義な時間となった。

■学院書華道展

学院では生神金光大神大祭の期間に書華道展を開催している。本年度も、文化活動の書道選択者と職員が、それぞれ思いを込めた字を書いた半切と、学院が所蔵する四代金光様や歴代の講究所長、学院長、講師など、先師の墨跡を展示した。

本年度は、毎年学院生が訪問させていただいている邑久光明園金光教求信会の榎本初子氏から、本年四月に訪問した際、新たに寄贈していただいた作品も展示させていただいた。

ここまでご指導いただいた先生方には改めてお礼申し上げます。



学院書華道展  
左・中：榎本初子氏の書  
右：学院生、担当講師、職員の書

# 日程

(冬期在籍教会実習まで)

9月	4	夏期在籍教会実習帰院式
	5	第三回 求道の日
	7	第一回 修徳殿入殿
	8	教話実習①
	11	修徳殿障子張り
	14	生神金光大神大祭御用奉仕
	15	学院・秋季霊祭
10月	2	聖蹟巡拝(吉備路)
	17	学院・生神金光大神大祭
	20	教学研究所見学
	27	青少年育成研修
	31	第二十七回文化活動合同茶会
11月	10	聖蹟巡拝(寂光院方面)
	17	第二回 定期考査
	25	第二信心レポート懇談
	28	創設記念式
	29	第四回 求道の日 (徒步行・金乃神道)
12月	1	第二回 修徳殿入殿
	4	布教功労者報徳祭並びに
	11	金光平輝君一年祭御用奉仕
	15	冬期在籍教会実習
	16	

# 学院生の

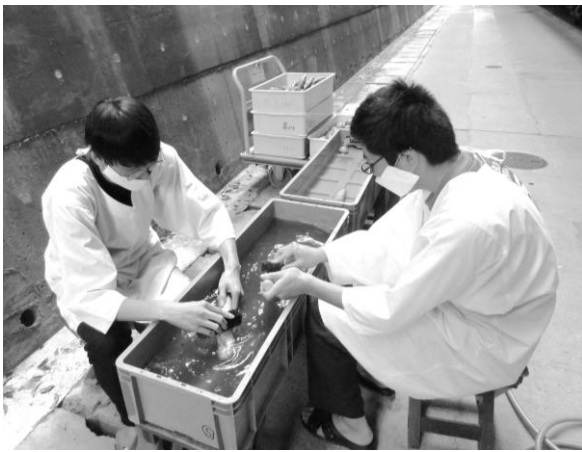
# 声!

気遣いの修行



徳島県・徳島教会  
高橋 茂智  
たかはし しげち

学院に入学させていただいて、七カ月が経過しました。学院では全寮制の共同生活が基本であるため、誰かと共に過ごすことがほとんどです。自分勝



生神金光大神大祭御用奉仕 (調饌係)

手な行動や生活習慣の乱れは他の人にとって嫌な思いをさせてしまう要因になるかもしれない。迷惑をかけるということから、さらに進んで、他の人のために手伝ってあげたり、あいさつをしたりすると相手は嬉しい気持ちになるかもしれません。実際に、私も様々な場面でそのことを感じさせてもらっています。学院では、神様についての様々な学びと共に、このような人に対する気遣いの精神をお育ていただけることはありがたいことだと思えます。



青少年育成研修

現代ではインターネットを使うことで直接人と会わずにやりとりすることが増えており、人と人が直接向き合おう、対人コミュニケーションが疎かになりがちだと思います。私はその部分も一年間の学院修行を通じて神様にお育ていただきたいと思っています。

## 自分を見つめる



三重県・伊勢教会  
高阪 暁  
こうさか あけみ

学院での修行生活も早くも七カ月が経ちました。期待や不安など色々な想いをもって入学した日から今日まで、多くの方々から祈られ、お育ていただいていることに感謝の気持ちで一杯です。

淡々と同じような日々を繰り返しているようで、神様への向かい方、感じ方等、その日その日で違いがあることに気付かされます。

学院のある先生が、「人と関わるからこそ、色んな自分が見えてくる」ということを仰いました。本当にその通

りだと感じたのと同時に、これまでの数々の出会いの有り難さを実感しました。学院生活では、日常の起居一切を同期の方々と共にします。その中で、様々な感情や自分のあり方を目の当たりにすることがありますが、その度に神様に心を向け、そこにどんな意味があるのか、かけられた願いは何なのかということに常に考え、神様を求めようとする日々です。

ここから残りの学院生活、今の私に必要な修行を神様が与えてくださるがままに受けさせていただける姿勢でありたいと思います。



第一回 教話実習